

保育者養成における「保育指導案」の指導方法に関する検討

Review of the teaching method for creating a child care teaching plan in the child care training

佐藤 牧子 原 孝成
(Makiko SATO Takaaki HARA)

Abstract :

The purpose of this report is to examine a new teaching method for the preparation of educational plans, one of the difficult tasks for students in childcare provider training schools, through the activities of the Department of Child Studies, Mejiro University. In teaching the preparation of educational plans in related classes, we found that a one-way teaching method following the format of an educational plan was not suitable. Furthermore, there are facts that it is difficult for students to grasp the actual condition of children and students cannot have experience of circulating between theory and practice enough. Based on these findings, we paid attention to the fact that the teaching method for the preparation of educational plans is heavily weighted toward teaching how to write and examined the method of comprehensive teaching in the Department by rethinking the teaching method flexibly..

キーワード : 保育指導案、指導方法、保育者養成

Keywords : child care teaching plan, teaching method, child care training,

1. はじめに

保育者養成校において指導案作成は、学生が困難を感じる課題の一つである。例えば、実習園と養成校の実習に関する意見交換の場では、学生の書くことの困難さが挙げられることが多いと報告されている (e.g. 菜原・小林, 2017)。また、指導案作成の困難さの原因として、実習先から求められる指導案が統一したものではないことや、指導案作成のための参考書が多数存在するが、それらには作成上の留意点が必ずしも明確ではないことがあげられている (e.g. 大滝, 2008)。さらに、実習のストレスとコーピン

グについて調査を行った研究によると、実習においてストレス得点が高かった項目として、①実習ノートを書くこと、②責任実習を行うこと、③指導案を作成することの順番でストレスを感じる学生が多かったことが報告されており (井上・町井, 2019)、やはり指導案作成が実習において学生にとって困難な課題となっていることがうかがえる。そこで、本報告では、指導案作成に関する研究を概観し、それを踏まえて本学子ども学科の指導案作成の指導への取り組みについて検討していく。

2. 指導実習の実施状況

菜原・小林（2017）は、学生を対象に幼稚園教育実習と保育所実習の指導案に関する質問紙調査を実施している。札幌近郊の調査によると、責任実習（日案）の作成状況は、幼稚園では0枚が0%、1～2枚が39%、3～4枚が52%、5枚以上が6%であり、保育所では0枚が15%、1～2枚が7%、3～4枚が5%、5枚以上が0%であった。また部分実習の作成状況は、幼稚園では0枚が0%、1～2枚が48%、3～4枚が41%、5枚以上が11%であり、保育所では0枚16%、1～2枚が47%、3～4枚が26%、5枚以上が3%であった。菜原・小林（2017）の調査では、保育所では、責任実習、部分実習を実施しない園が約15%存在し、責任実習を実施していない園も1割程度存在しているようである。また保育所実習に対して同様の調査を行っている小林（2020）の調査でも、保育所実習で指導実習を97%実施していたが、その内訳として部分実習68%、責任実習8%、両方24%であった。この報告でも、保育所実習の1割弱で指導実習自体を実施しておらず、指導実習を実施している園の7割近くが部分実習のみという状況である。本学子ども学科においても似たような状況であり、学生からの実習報告を概算すると、保育所実習Iでは、指導実習がなかった12%、部分実習のみ82%、責任実習あり5%、保育所実習IIでは、指導実習がなかった1%、部分実習のみ53%、責任実習あり46%であった。つまり、保育所実習Iでは、指導実習自体がなかったものが1割程度あり、指導実習があった場合もそのほとんどが部分実習であった。また、保育所実習IIでは、指導実習がないというケースはないが、責任実習までを実施する園は約半数というところであった。指導案の作成では保育所では部分実習が中心であるのに対して、幼稚園では部分実習と責任実習共に実施されることが多く、指導案の作成では幼稚園の実習で指導案の作成がより求められていることがうかがえる。保育所において責任実習が極端に少ないのは、保育所実習での事前オリエンテーションの学生の報告などを見ると、幼稚園の保育時間が4時間、保育所の保育時間が8時間であり、責任実習を行うと

かなり長時間の指導を行うことになることが一つの原因と考えられる。また、もう一つの原因として、近年保育所では自由保育を標榜している園や、3歳以上児クラスを縦割りクラスにし、広めの保育室に遊びのコーナーを沢山設置する園も増えてきており、従来の設定保育を実施していない園も存在している。実際、実習受け入れ保育所の中には、「通常、（本保育所は自由保育を行っているので）設定保育は行っていないませんが、実習生を受け入れたときだけ設定保育にし、実習生に指導案を作成してもらいます。」と言われることもあり、設定保育を通常実施していない自由保育の保育所における指導実習の在り方についても考えていく必要があるかもしれない。この点に関して、昨年2020年度より本子ども学科では「保育所実習指導II」と「保育の計画と実践¹⁾」の授業の中で「遊び発展型²⁾」の指導案の作成について授業で触れるようにし、従来の設定保育以外の保育形態での指導案の作成について指導を行うようにしている。

3. 指導案指導の状況

他の保育者養成校の指導案の指導方法の実践についてまとめる。まず増井（2018）は、幼稚園実習の第1段階と第2段階の終了後に質問紙調査を実施し実習指導の在り方について検討している。その結果、第1段階では「子どもへのかかわり」や「指導案の作成」、「事前準備（教材研究）」などの課題が見出され、それらを踏まえた授業を展開している。その後、第2段階終了後の調査では「事前準備（教材研究）」については効果が見られたが、「子どもへのかかわり」や「指導案の作成」については、一定の効果が見られるにとどまっていた。このことから、現在の授業展開に加え子どもの発達段階を理解した上での「幼児理解」を主眼においた授業展開が必要であることを示唆している。本学子ども学科では、2021年度より、カリキュラムの改定に伴い「保育所実習I」が3年次の夏休み期間中、「保育所実習II」が3年次終わりの春休み期間中の実施になっており、増井（2018）の実践のように保育所実習Iの段階を踏まえ「保育

所実習Ⅱ」に向けて、「保育所実習指導Ⅱ」や「保育内容の計画と実践」の授業を通して指導計画作成について指導できる体制がとれるようになった。しかしながら増井（2018）が示すように、単純に授業を行えば指導案作成の効果が上がると言えず、子ども理解（幼児理解）に基づく指導案の作成のための取り組みが必要になることが予測される。

次に福井・丹生・山成（2018）は、指導案指導を組み入れた授業について報告している。その中で表1に示すような指導内容を示し、その指導案の添削と模擬保育の実践が実践されている。本学子ども学科においても、「保育の計画と実践」の授業の中で指導案の作成と模擬保育を行う授業実践を行っているが、福井ら（2018）の実践では約90名受講学生に対して指導者の教員が20名配置されており、かなり手厚い指導が実践されている。本学子ども学科の「保育の計画と実践」では約140名の学生に対して教員2名で授業を行っており、マンパワーの少なさが否めない状況である。

表1 福井・丹生・山成（2018）の実践における指導案指導の内容

<p>【ねらい】子どもたちに育ちつつある力を伸ばすためにはどのようなねらいを掲げるとよいかを「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」の記述を読み、考える。</p> <p>【環境構成】予定する活動を展開するための準備や手順を書くだけでなく、どんな素材をいくつ準備するか、イス・テーブルなどの配置を図示し、活動がスムーズに行える動線に配慮する。</p> <p>【予想される子どもの活動】子どもがどう動き、何をする、どんな歌を歌うかについて書き込み、それらに応じた対応の仕方を考える。</p> <p>【保育者の援助と留意点】子どもの活動が望ましい方向に展開するように様々な展開をシミュレーションし、援助を考える。</p>

さらに林（2018）は、指導案作成の過程において学生が何を難しいと感じているか、またその難しいと感じていることが実習前後でどのように変わったかを明らかにするために、指導案作成過程を「1.子どもの姿をイメージする」、「2.主活動を考え」、「3.ねらいを考える」、「4.内容を考える」、「5.環境構成を考える」、「6.活動の展開を考える」、「7.教師の援助を考える」

の7項目とし、それぞれの「難しさ」について検討している。その結果、実習前には「3.ねらいを考える」、「4.内容を考える」、実習後は「6.活動の展開を考える」、「7.教師の援助を考える」が学生にとって難しいと感じている項目であると述べている。

本学子ども学科の「保育の計画と実践」での指導内容を林（2018）の実践と比較すると、本学子ども学科では、「1.現在の子どもの姿」、「2.ねらい」、「3.内容」、「4.主活動」、「5.環境構成」、「6.予測される子どもの動き」、「7.実習生の援助と留意点」となっており、指導内容は多少の表現の違いがあるが、共通している部分が多いと思われる（表2参照）。

しかしながら、指導の順序として、林（2018）の実践では「2.主活動を考え」が2番目に来ているのに対して、本学子ども学科では「4.主活動」となっている。学生が考える際には、確かに主活動である「遊び」を考えて、それに合わせた「ねらい」と「内容」を設定する方が考えやすいといえるかもしれないが、本学子ども学科では理論的な観点から「ねらい」と「内容」から主活動を考えていく流れで学生に指導を行っている。また、林（2018）の結果と共通して、実習前には「ねらい」と「内容」を設定することの難しいという学生の声は多く、そのための指導の工夫が必要になると考えられる。

4. 本学子ども学科の指導案作成の指導について

（1）指導案の形式と指導内容

本学子ども学科で使用している指導案の形式は、以下の通り施設実習（図1）、保育所実習（図2）、教育実習（図3）と実習種ごとに用意されている。教育実習において「活動名」が設けられている点と、実習種によって「子ども」と「利用者」の表記分けがされている点を除けば、基本項目やレイアウトなどの形式は統一されている。指導においても、前述の通り理論的な観点から「1.現在の子どもの姿」、「2.ねらい」、「3.内容」、「4.主活動」、「5.環境構成」、「6.予測される子どもの動き」、「7.実習生の援助と留意

表2 目白大学の指導内容

指導案の部分	指導内容
「現在の子どもの姿」	【子ども個人】 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味・関心（好きな遊び）・運動面、生活習慣の自立、対人関係、認知、言葉、など発達の状況 ・友だちや保育者との関わり、クラスの様子 ・特別な配慮が必要な子ども（アレルギーや障がいなど） 【クラス】 <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの保育活動 ・地域の特徴、季節、行事にあわせた活動
「ねらい」	<ul style="list-style-type: none"> ・「現在の子どもの姿」をもとに「ねらい」を設定し、「内容」を決定する ・ねらいと内容「ねらい」⇒活動の目標、保育者の願い、“未来の子どもの姿” ・「ねらい」は子ども中心で書く（主語は子ども） ・園の目標や月案、週案などを考慮 ・子どもの発達の状況や興味・関心・これまでの保育活動や行事
「内容」	<ul style="list-style-type: none"> ・「ねらい」を達成するための具体的な「内容」 ・「内容」⇒ねらいを達成するための活動、“目標に向かってすること”、“そこに至る方法”
「環境構成」	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な（物的・人的）環境を構成する ・発達視点をもって環境構成する ・生活の流れを考慮する ・安全及び衛生面を十分に配慮しておく ・子どもの主体的活動を引き出す ・保育室の配置図、作り方、完成予想図等の図を取り入れる
「予測される子どもの動き」	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの反応や動き、興味・関心・様々な場面を想定し、子どもの行動や言葉ができる限り細かく予想し書く ・ハプニングなども想定する
「実習生の援助と留意点」	<ul style="list-style-type: none"> ・実習生の援助や配慮をできる限り細かく予測して書く ・子どもへの接し方、言葉がけを考えておく（※具体的な言葉やしぐさを考えておく） ・「ねらい」との関係に留意する ・環境構成や準備についての注意点 ・衛生や安全に対する配慮・個別配慮（アレルギーや特別支援など）
展開	〔前の活動→導入→主活動→まとめ→次の活動〕の流れを意識する

点」の流れで基本項目の指導が統一されている。各項目の指導内容は、表2の通りである。

（2）指導案作成の指導の一例

1) 科目「保育の計画と実践」の概要

- i) 受講対象：幼稚園教諭免許の取得を目指す3年生（約140名）
- ii) 開講時期：3年後期
- iii) 授業のねらい：「保育実践は、幼児期に育てたい資質・能力について保育者が理解し、それに基づく保育の構想の上に成り立っている。本授業では、全体的な計画に基づく指導計画の立案、保育実践に必要な子ども特性・家庭や地域の実態・学び＝遊びの環境についての理解、実践の評価

について演習を通して習得していくことを目的とする。³⁾」

- iv) 授業内容：全15回が講義と演習で構成されている（表3）。2019年度、2020年度は筆者両名が担当した。2020年度については、コロナ禍の影響を受けて同時双方向型とオンデマンド型を併用した全面遠隔授業を実施した。

日 時	年 月 日 (曜 日)	実習生氏名
利用者	男性 名 女性 名 計 名	
担当職員名		
現在の利用者の姿	ねらい	
	内容	
時間	主な活動・環境構成	予想される利用者の活動 実習生の援助と留意点

図1 指導案（施設実習）

日 時	年 月 日 (曜 日)	実習生氏名
クラス名	組 (歳児)	在籍 男児 名 女児 名 計 名
担任名		
現在の子どもの姿	ねらい	
	内容	
時間	主な活動・環境構成	予想される子どもの動き 実習生の援助と留意点

図2 指導案（保育所実習）

日 時	年 月 日 (曜 日)	実習生氏名
クラス名	組 (歳児)	在籍 男児 名 女児 名 計 名
担任名		
現在の子どもの姿	ねらい	
	内容	
	活動名	
時間	主な活動・環境構成	予想される子どもの動き 実習生の援助と留意点

図3 指導案（教育実習）

表3 2020年度「保育の計画と実践」内容

1	講義	オリエンテーション
2	講義	指導計画とは何か
3	講義	指導案の考え方
4	講義	子どもの理解
5	講義	遊び発展型の指導案の立て方
6	講義	保育における評価・省察
7	演習	先輩の指導案と模擬保育から学ぶ① 2事例
8	演習	先輩の指導案と模擬保育から学ぶ② 2事例
9	演習	模擬保育の発表用動画撮影
10	演習	模擬保育の発表①
11	演習	模擬保育の発表②
12	演習	模擬保育の発表③
13	演習	指導案の修正、年齢別指導案の展開
14	講義	教材研究の方法、小学校への接続
15	演習	講義全体の振り返り

2) 2020年度 授業の実際

i) 指導案作成の指導における留意点

指導案作成の指導においては、書き方を修得することが第一義となるような指導を避ける必要があると考える。なぜなら書き方指導が中心になることで、保育の実態から離れた指導案になってしまう恐れがあるからである。その点を踏まえ、本授業においては、カリキュラム（教育課程、保育の全体的な計画、教育・保育課程）の全体像の中で、指導計画があり、その中に長期計画（年間指導計画、期間指導計画、月間指導計画）と短期の計画（週の指導計画、1日の指導計画、部分の指導計画）があるなど、幼児教育・保育（以下、保育）における指導計画・指導案（以下、指導案）の位置づけや意味・内容を理解することを大切にしたい。大枠を理解した上で、指導案の項目についての詳細を確認して、作成に関する指導を行なった。実習におい

て、実習先が用意した指導案の形式で書くことを求められる学生もあり、書き慣れた大学指定の指導案ではないことから書き方がわからず困惑したという話がある。しかし実際には双方の指導案において基本的項目に大きな相違はなく、形式の違いや多少の項目名称の違いがあるだけである。その点からも指導案作成の指導にあたっては、項目一つ一つの意味・内容の理解を深めることに重点を置くことで、指導案の構成要素を抑え、異なる指導案の形式にも対応ができるよう留意した。

「遊び発展型」の指導案

また、自由保育やプロジェクト型保育、縦割り保育が増えてきていることを踏まえ、従来型の活動提案型とは異なり、子どもの自発的な遊びや活動を展開していくタイプの「遊び発展型」の指導案についても扱った。指導案の項目は概ね同じであるが、活動提案型よりも「現在の子どもの姿」を元に子どもの実態を捉えて子ども理解を行うことがより重要になることや、「主な活動と環境構成」においては、時間的な流れよりも、遊びの場・空間を意識した環境構成を考え、遊びがどのように発展していくかを考えることが、遊び発展型の指導案のポイントになることを伝えた。指導案の形（活動提案形、遊び発展型）の指導を通して、保育形態の理解を深めることにもつながっていると考える。

保育における評価・省察

さらに「保育における評価・省察」においては、①子どもの状況を正確に理解すること、②活動のプロセスを理解すること、③子どもの評価を通して保育者の活動が適切であったかを知ることが目的として、保育における各種評価方法とPDCAサイクルを確認し、よりよい保育を行うために常に自分を振り返ることが重要であることを伝えた。また、「保育の質の評価」においては、保育は結果ではなくプロセスが重要であることをラーバースの評価モデル⁴⁾を用いて説明し、合わせて「指導計画の評価・反省のチェックリスト」の項目の意味と意義の確認を行なった。

指導案の修正、年齢別指導案の展開

模擬保育の発表後は、グループメンバー（5人平均）全員からワークシート（表4）を通して10項目のアドバイスを受け、それらを踏まえて実践を振り返り、指導案の修正を行った。さらに、経験値などの違いにより子どもの実態が予想と異なる場合や、異年齢保育の場合など、状況に応じて指導案を柔軟に修正・改善する力を養うことをねらいとして、発表した指導案の対象年齢を変えた場合、①ねらい、②環境構成、③配慮事項、④その他において必要となる修正点を書き出し、学生自身が計画と実践を行った指導案に再度手を加え、次の指導計画につなげることで、PDCAサイクルを実践した。

表4 模擬保育後、発表者が受け取るワークシートの10項目

指導案について	① 現在の子どもの姿について ② ねらい・内容・活動について
模擬保育について	③ 話し方が適切で、聞きやすかったか
計画と実践の関係について	④ 指導案のねらいは、実践に反映されていたか ⑤ 活動内容が子どもの年齢に合っていたか ⑥ 子ども全体に目を配りつつ、一人ひとりへの対応が適切に行われていたか ⑦ 子どもに対する活動内容の説明が適切で、わかりやすかったか ⑧ 子どもから興味・関心を引出そうとする工夫ができていたか
全体を通して	⑨ よくできていたところ ⑩ 改善が必要なところ

授業後の学生のリフレクションからは、指導案の作成→模擬保育→他者からのアドバイス→自己省察→指導案の改善を通して、より具体的な改善点が見えて、知識や技術が深まっていく実感がもてたという声が寄せられた。また、年齢別指導案の展開を通して、自分の考えた活動が、想定していた年齢よりも別の年齢に向いていることに気付いたり、遊びを発展させる方法や、指導案を改善していく方法がわかったりと、指導案作成へのスキルの深まりが感じられた。

たというリフレクションが多数寄せられた。

講義全体の振り返り

第15回の授業においては、全体を振り返ると共に、本授業で得た力を学生自身が確認するために、15分という制限時間内で、こちらが提示した指導案の「ねらい」に合わせて、対象年齢、活動内容と提案理由を述べるという活動を行なった。全24グループを二つに分け、一方には「友達と協力することを楽しみ、達成感を味わう」、もう一方には「友達と考えを共有する」という多様な活動が想定される「ねらい」を提示した。グループで同時に一つのGoogleドキュメントに書き出し、グループ内で活動が被らないことも条件とした。15分で立案した後は、発表形式で履修者全体が案を共有し、さらにそれらの案を一つの資料にまとめて、学生が今後に生かせるよう配布した。

授業後の学生のリフレクションでは、二つの「ねらい」に対して15分という限られた時間で、履修者全員が異なる活動を考えられたことへの学生自身の驚きと、着実に力がついてきたことへの実感が書かれていた。

講義全体の振り返りでは、一つの「ねらい」から多種多様な活動が生まれることを実感することで、同じ「ねらい」であっても、子どもの姿に合わせて指導案を自在に立案・改善することが可能であることや、チーム保育の中で多様な考えを生かすことの意義に気づいて欲しいという願いを込めた。

ii) 子どもの理解

指導案の作成の前に、保育の基本である「子ども理解」の時間を設けることにより、改めて子ども理解の重要性を確認し、指導案の大元となる「現在の子どもの姿」や、実習生の援助と留意点の元となる「予想される子どもの動き」の内容が深まるよう留意した。

子ども理解の重要性を確認した後は、実際に筆者が体験した2事例を用いて、各自が理解した子どもの姿について、グループ内で意見交換を行った。意見交換を通して、同じ情報（子どものプロフィールや状況説明）を元にしても、解釈が異なり多様な子ども理解が生まれること

を学生は実感した。さらに、子ども理解においては、様々な方法（観察、子どもと活動を共にする、各種記録、保育者間の情報共有、家庭との連携など）を用いながら、多角的な視点（短期、長期、集団、個人、子どもを取り巻く環境など）をもつことが重要であると確認した。

iii) 先輩学生から学ぶ意義

指導案を作成する前に、指導案と模擬保育を客観的に見て学ぶ時間を設けた。実践事例は、学生にとって身近なレベル感であることが学生の気づきを促すであろうという意図の元、あえて保育者のものではなく、先輩学生に許可を得て前年度の同授業で先輩学生が作成した指導案と模擬保育（映像）のセットを教材とした。教材は4セット準備した。

授業では、先輩学生の指導案を確認した後に実践動画を視聴した。その後、事前に提示した模擬保育を見る視点を元に、グループディスカッションを行った。提示した視点は、指導案については、「子どもの姿」-「ねらい」-「内容」-「活動」の関係について、模擬保育においては、①声の大きさ、話し方が適切で、聞きやすかったか、②活動内容の説明が適切で、わかりやすかったか、③子どもから興味・関心を引出そうとする工夫ができていたか、④子ども全体に目を配りつつ、一人ひとりへの対応が適切に行われていたか、⑤活動内容が子どもの年齢に合っていたか、である。視点を提示することで、ディスカッションの内容を深めると同時に、学生自身が指導案の作成と実践を行う際の視点を培うことができるよう留意した。

学生のリフレクションからは、先輩学生の指導案と模擬保育をセットで見ることにより、指導案上ではスムーズな流れに思えた内容が、実際に動いてみると子どもにとっては不自然な流れになっているなど、指導案だけでは気がつかなかった課題が具体的にみえてきた様子が伺えた。

iv) 模擬保育の発表

発表内容については、グループ内（平均5名）で内容が被らないよう種類（シアター系、手指系、身体運動系、飛ばす系⁵⁾、対象年齢（3歳、4歳、5歳）、季節（春夏秋冬）の組み合わせ

わせを工夫し、発表内容の充実を図った。コロナ禍における模擬保育の発表だったため、個別に作成した指導案を元に模擬保育の実践を映像に起こして、グループ内で発表する形式を取った。模擬保育の実践動画は、授業時間の関係上、9分以上10分以内に収めることとし、構成は①導入、②主活動、③活動終了の3部構成とした。動画の制限時間内に主活動全てを実践することは不可能であることから、活動の要となる箇所を各自が抽出して動画に盛り込むことを条件とした。

発表は次の手順で行った。①発表者による発表内容の説明（指導案の内容説明、特に工夫した点、意見をもらいたい点を伝える。）、②動画による模擬保育の発表、③質疑応答、④発表者以外による発表用ワークシートへの記入。

発表用ワークシートは、事前にGoogleドキュメントに発表者が指導案を貼り付け、発表者に対するコメントがオンライン上で複数同時に記載できるように準備した。コメントの視点は前述の表4の通り10項目を提示し、グループメンバー全員から10の視点でコメントをもらうことにより、発表者が指導案の計画と実践の包括的なアドバイスを得られるよう留意した。また、コメントを書く側にとっても、指導案の計画と実践を行う上での視点を得られるよう意識した。

模擬保育の発表においては、複数人分の指導案と模擬保育をセットで見たことにより、指導案と実践が連動している例と、実際には指導案通りに実践することが難しい、いわゆる連動していない例の両方を目の当たりにすることとなった。模擬保育後の学生のリフレクションからも、特に指導案と実践（模擬保育）を連動させることについての難しさや気づきに関する学びが多く挙げられていた。また、様々な視点から具体的なアドバイスをもらうことで、新たな気づきが生まれ、視野を広げるきっかけになったという声も寄せられた。

5. 指導案作成の指導における課題

指導案作成に関する研究を概観した結果と本学子ども学科の指導事例を元に、指導案作成における指導の課題を以下に示す。

架空の設定による指導案作成

養成校において学生が指導案を書く際は、指導案の大前提となる園のカリキュラム、クラスの目標、実習園の指導方針などの情報、「現在の子ども（利用者）の姿」などが、架空の設定にならざるを得ない。各科目において、カリキュラムや発達についてなどの必要な知識は抑えられているが、実習経験が少ないことに加え、日頃から子ども（利用者）に関わる機会が少ないことから、学生の設定に実感がともなっていない点が課題として挙げられる。実際に、架空であった情報が実習において開示されるという現実直面し、急に開示された情報を処理しきれずに指導案が書けなくなるという学生が少なからず存在する。

指導におけるマンパワーの不足

本学子ども学科では、前述の通り理論的な観点から「ねらい」と「内容」から主活動を考えていくという順番で指導案作成の指導を行っているが、実際には学生がイメージしやすい項目である「内容（活動）」から書き進めている実態が散見される。

また、「遊び発展型の指導案の立て方」の授業後のリフレクションからは、「色のついた水で絵を描く」という活動からは、どのような発展が考えられるかという具体的な質問が寄せられた。学生へのフィードバックでは、「色のついた水で絵を描く」活動に至るまでの過程が重要であることを伝え、子どもと水の出会いに注目して、そこから遊びを発展させていく仕組みを説明した。その他にも、学生の質問の中には教員が想定していないような内容が含まれていることもあり、学生と教員間の前提に少なからずズレがあることは否めないであろう。

これらのことを鑑みると、指導案作成の指導においては、ある程度個別の丁寧な指導が望ましいと考えられるが、実際には本学子ども学科の「保育の計画と実践」では約140名の学生に

対して教員 2 名、その他の実習指導においても多くて教員 4 名の配置が現状であり、マンパワーの不足が課題として挙げられる。

理論と実践の往還

「保育の計画と実践」では、計画から実践、さらに省察から計画の見直しという形で、PDCA サイクルを回す授業を行なっているが、全15回の授業においてはPDCAサイクルを一巡するにとどまっているのが現状である。学生は各専門科目において、保育に必要な知識を得ているが、その知識を使ってPDCAサイクルを回すという点では、経験が不足している。知識を使って実践し、PDCAサイクルを回すということは、すなわち理論と実践の往還を経験することである。理論と実践を往還させる経験は、学生が実際に保育等の現場に出た際に必要な力である。その点においては、理論と実践を往還させる経験の場の不足が課題として挙げられるだろう。

6. 考察と検討

改めていうまでもなく、指導案は保育に直結しているものである。指導案作成にあたり本學子ども学科では、理論的な観点から書く順番を指導しているが、理論的観点が重要である意味は、指導案においてどの項目から書き進めていくかということが、保育をどのように構想するかに直結しているからである。指導のしやすさ、学生の書きやすさを優先して、指導案を「内容（活動）」から書く指導を行う例もあるが、書く順番が保育の構想に直結している観点から言えば、これは「活動を中心とした保育」を作っていることになる。すなわち指導案を書く順番は、「子どもを中心とした保育」を作ろうとしているのか、「活動を中心とした保育」を作ろうとしているのかを問うものであるとも言える。さらに、子どもの主体性を大切にする「子どもを中心とした保育」の重要性を説く一方で、活動重視型の指導案を書かせているという点で、指導に矛盾が生じている可能性も否めない。改めて、指導案は書き方を覚えて書き上げれば良いという類のものではなく、指導案を書

き進める過程が保育をどのように捉えるかに直結していることを認識して指導にあたる必要がある。

その点を踏まえて、指導案を書く大元にあたる「子どもの姿」について検討していきたい。指導案作成において「子どもの姿」が重要である理由として、小林（2020）は「子どもの姿が予想できなければ、最善の環境を考えることも難しく、何より何を援助すればもっと子どもの活動が豊かになるのか考察することも難しいであろう。」と述べており、指導案において「子どもの姿」が要となることは明らかである。つまり、指導案の練習段階で、子どものリアルな姿をどこまで抑えることができるかが、指導案の質にも大きく影響してくると言えるだろう。実際に養成校における指導案の作成においては、「子どもの姿」にリアリティーをもたせるために、学生が日頃から子どもに関わる機会をもち、子どもを見とる力を養い、さらに発達段階を抑えた上で子ども理解（幼児理解）に基づく指導案の作成を丁寧に行なっていく必要がある。そのためには、実習に関連する特定科目内での指導にとどまらず、関連する専門科目が連携して総合的に指導を行うことが効果的であると考ええる。

そこで、改めて指導案作成に必要な要素を整

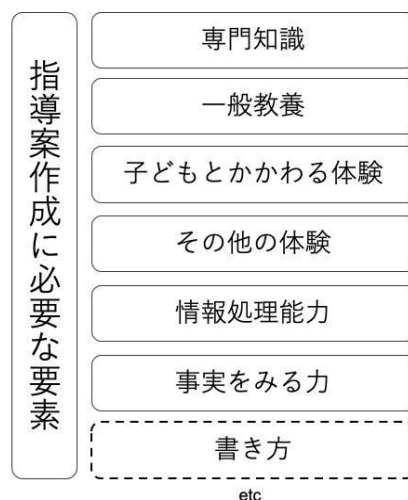


図4 指導案作成に必要な要素

理してみると、図4で示したようにいくつかの要素から成り立っていることが確認できる。つまり、指導案の書き方を修得することは必須事項ではあるが、書き方がわかっているならば指導案が作成できるものではないことから、「書き方」はあくまでも指導案作成における要素の一つに過ぎないと捉え、書き方指導に偏重した指導認識を改める必要があると考える。

こうして指導案作成の指導を柔軟に捉え直すことは、各科目の特性を生かした指導案との多様なかかわりを生むと考えられる。実際には科目の特性上、指導案を直接的に扱うことが難しい科目が存在することも事実だが、指導案の指導を柔軟に捉えることで、指導案の作成そのものを取り入れなくとも、指導案作成において要となる具体的な子どもの姿を捉えることができる体験などを通して指導案に十分に関わることができるのである。もちろん、指導にあたってはどの部分でどのように指導案とかかわりがあるのかという点を明確にして取り組むことが重要である。また、実習関連科目などと連携して、その科目や学年に合わせた形で指導案の事例提供を受けたり、共有したり、場合によっては学生が対峙するであろう「子どもの姿」の部分だけでも情報提供を受けることで、リアリティーのある子どもの姿を元に指導案を作成する課題があっても良いだろう。いずれにしても、指導にあたっては学生と教員間の想定にギャップがないように、教員が学生の実態を把握して進める必要がある。例えば、「5. 指導案作成の指導における課題」において提示した学生のリフレクションの事例「色のついた氷で絵を描く」などのように、具体的な学生の想定がわかるような事例や指導実態などを教員間で共有することで、各科目単位ではなく、総合的に学生の実態を把握して指導に当たることができる。そうすることで、マンパワーの不足に関する課題や、理論と実践の往還に関する課題にも対応することができると思う。

今後は、教員同士が指導案に関わる情報を共有できる体制を整えるなど、指導案における多様な指導方法が創出されるような仕組み作りを行い、関連する専門科目において総合的に指導する方法を模索したいと考えている。

【注】

- 1) 2021年度から「保育内容の計画と実践」に名称変更
- 2) 久富陽子(編)(2009/2017).『幼稚園・保育所実習指導計画の考え方・立て方』萌文書林において使用されている名称。
- 3) 2020年度「保育の計画と実践」のシラバスに示した授業のねらい
- 4) ラーバースは、保育の質を安心度(情緒的な安心の度合い)と熱中度(夢中になっている度合い)、大人の関与の三つの要素から捉える評価方法を提案している。

ラーバースの評価尺度はSICS(Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings: 保育施設のための過程を重視する自己評価指標)としてOECDで保育の質をモニターする指標の一つとして紹介されており、日本版SICSも開発されている。

「保育プロセスの質」研究プロジェクト 幼児教育映像制作委員会 秋田喜代美・芦田宏・鈴木正利・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊(代表)(2010).『子どもの経験から振り返る保育プロセス: 明日のより良い保育のために』幼児教育映像制作委員会

- 5) ストローを吹いて飛ばしたり、紙飛行機を手で飛ばしたりなど、飛ばす系の遊びの種類の総称

【引用・参考文献】

- 福井真裕子・丹生直子・山成昭世(2018).「保育者養成校における幼稚園実習指導の試み: 現場保育者による指導案実践指導を通して」『京都聖母学院短期大学研究紀要』47, 27-34.
- 林理恵(2018).「短期大学保育学生の保育指導案作成に関する考察: 幼稚園実習での学びに着目して」『幼年教育WEBジャーナル』1, 13-20.
- 井上清子・町井富子(2019).「幼稚園実習中のストレスとストレスコーピングについて」『教育学部紀要』52(別集), 25-33.
- 久富陽子(編)(2009/2017).『幼稚園・保育所実習指導計画の考え方・立て方』(第2版) 萌文書林.
- 小林美花(2020).「保育実習における指導案の現状と今後の可能性」『北翔大学教育文化学部研究紀要』5, 45-52.
- 増井啓子(2018).「アンケートから見える教育実習指導の学びと課題: 実習事前指導・実習・実習

- 事後指導を通して」『奈良佐保短期大学研究紀要（特別）』87-101.
- 菜原桂子・小林 美花（2017）.「幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題」『北翔大学短期大学部研究紀要』55, 139-145.
- 大滝まり子（2008）.「幼稚園実習における指導案作成の留意点」『北海道文教大学研究紀要』32, 49-56.